

競技カヌーと関学カヌー

カヌー部 植田賢太郎（昭和 39 年卒）

1. カヌーについて

(1) 起源

カヌーは昔の人々の移動手段として、あるいは狩猟や輸送の道具として、海洋・湖沼・潟・河川などあらゆる場所で水に浮かべる小さな乗り物として存在したのです。最も古いカヌーは 6 千年ほど前のユーフラテス河畔にあるシュメール人の王の墓から発見されています。いずれにしてもカヌーは人類にとって生活に根ざした最も古い道具のひとつであります。

(2) 形態

進化したスポーツとしてのカヌーには、甲板のないカナディアンカヌー（CANADIANCANOE）と漕ぎ手が座るコックピット以外は甲板で覆われたカヤック（KAYAK）があり、カナディアンカヌーは片端に水かき（シングルブレード）の着いたパドル（船に固定されない一種の櫂）が用いられます。ラダー（舵）は無く、方向転換は基本的にパドルの操作によって行います。カヤックは両端に水掻きの着いたパドル（ダブルブレード）が用いられます。後方にラダーがあり、艇の内部（足を置く部分）でラダーを操作します。カヌーはパドルを用いて前進させるのですが、最大の特徴は漕ぎ手が艇の進行方向を向いていることです。ボートと混同されやすいのですが、ボートはリガーというオールを支える支点があり（カヌーには支点がなくパドルが固定されていません）、進行方向に対して後ろ向きに推進させます。

〈出典 日本カヌー連盟〉

2. 競技カヌーについて

(1) 競技の種類

国際カヌー連盟が統括するカヌーの種目は以下の通りです。

①カヌースプリント＝オリンピック種目（12 種目） 静水面で 1 人乗りから 4 人乗りまでの艇に乗り、一定の距離（200m、500m、1000m）と水路（レーン）を決めて複数の艇が一斉にスタートして最短時間で漕ぎ、着順を競う競技です。カヤック部（K）とカナディアン部門（C）に分かれます。関学は男女共この種目のカヤック部門を主とし、最近ではカナディアンカヌーにも取り組んでいます。

②それ以外の競技種目に カヌースラローム（オリンピック種目）・カヌーワイルドウォーター・カヌーポロ・ドラゴンカヌー・フリースタイルカヌー、それ以外の種目にカヌーマラソン、カヌーセーリング、ラフティング、シーカヤック等があります。

(2) 競技の黎明

スポーツとしての近代カヌーは、19 世紀中頃イギリスで芽生えました。1850 年代から 1860 年代初めにかけてイギリスのテムズ川下流で、近代的な甲板のあるカヤックの原型が見られるようになりました。これが普及したのはスコットランド出身で弁護士・冒険

家のジョン・マグレガーがエスキモーカヤックを改良して軽いカヤックを作り、「ロブロイ」と名付け、このカヌーに乗ってバルト海・地中海や河川を漕ぎまわって、近代カヌーの普及・発展に寄与しました。1866年にイギリスにカヌークラブができ、同年テムズ川で最初のカヌーレースが行われました。1887年イギリスカヌー協会が誕生、それがきっかけとなって欧州全体に普及しました。1924年に競技カヌーとしての国際組織である国際カヌー連盟が設立され、1946年に現在の国際カヌー連盟（ICF）へと発展的に改組されました。第1回の世界選手権は1930年。オリンピックに正式種目として採用されたのは1936年の第11回ベルリン大会です。

(3) 日本の競技カヌー

日本におけるカヌー競技は1940年（昭和15年）に開催が予定されていた第12回オリンピック東京大会の準備のため、第11回ベルリン大会のボートの選手団がドイツ製のカヤックとカナディアン艇を持ち帰ったのが始まりです。1938年日本カヌー協会が設立されましたが、第2次世界大戦の激化に伴い1942年（昭和17年）に解散、日本漕艇協会カヌー部として存続致しました。戦後、国際カヌー連盟に1951年（昭和26年）復帰が認められ、1960年（昭和35年）日本カヌー協会が復活しました。1964年（昭和39年）第18回東京オリンピックでフラットウォーターレーシングが正式種目として採用されたことから国内におけるカヌー競技は普及と強化の両面で大きく躍進しました。1966年（昭和41年）日本体育協会に正式加盟、1980年（昭和55年）公益社団法人日本カヌー連盟へ法人化されました。1982年（昭和57年）島根国民体育大会から国体正式種目として実施されています。

〈出典 日本カヌー連盟〉

3. 関学カヌーについて

関西学院大学体育会カヌー部はカヌー同好会として1958年（昭和33年）に設立されてスタートしました。設立までのおおよその経過は次の様だったそうです。

設立の中心人物は昭和36年卒の岸氏でありました。岸が時事通信社大阪支店に市場調査のアルバイトに行き、同社社員の米田氏と知り合ったのがことの始まりです。米田氏からカヌー競技はどういうものなのか、また同競技が昭和39年の東京オリンピックの正式種目になるであろうとの話を聞き及びました。これを機に岸は色々なところから情報を収集、オリンピック正式種目になるとの信念のもと、関学からカヌーのオリンピック選手を送り出したいとの夢を実現するために同好会を立ち上げたのです。

当時競技として活動していたのは大正大学・専修大学ぐらいで、関西でこの競技に携わっていた人は皆無で、全くマイナーなスポーツでした。そんななかで、岸は大正大学OBやカヌーの先人たちとコンタクトを取り、関西地区で選手育成のための艇の確保に奔走。その結果、ベルリンオリンピックに参加した日本ボート選手団が次回開催の東京オリンピック（戦争で中止）に備えカヌーを持ち帰りました。そのカヌーを参考に国産カヌーが製造され、その内の一艇が西宮市香櫨園のスカルハウスに預けられていることを知り、これを借り受け、関学カヌー同好会の活動は具体化したのです。このような経過で関学カヌーの最初の練習場は香櫨園浜でスカルハウスの一角を借り唯一、二人乗りカヤック一艇でス

スタートしたのです。

初陣は昭和 35 年（日本カヌー協会が復活した年）の日本選手権で初出場・初優勝（坂根・阪本組）、36 年も優勝し連覇を達成、関学カヌーの幕開けとなりました。また、昭和 39 年の東京オリンピックの後、学生カヌー連盟が発足し、昭和 40 年、第一回全日本学生選手権・関西学生選手権が開催され、いずれも団体制覇を達成しました。これが今、カヌー部の部是となっている全日本学生選手権・関西学生選手権での団体制覇の原点であります。

昭和 40 年、体育会カヌークラブに昇格。43 年には体育会カヌー部となり、名誉ある関西学院大学体育会の一員になりました。また、平成 9 年には女子部員が入部し、今日の体制が出来上がりました。この間、平成 27 年までに全日本学生で男子 9 回・女子 4 回・関西学生で男子 15 回・女子 4 回の優勝を成し遂げました。特筆すべきは、平成 23 年の男女同時全国制覇で関学体育会史上初の快挙だと思います。また、個人の全国制覇・関西制覇、世界選手権・アジア選手権・ワールドカップの選手派遣等の実績がありますが、残念ながら設立のきっかけとなったオリンピック選手を未だ送り出し得ていません。

とはいえ、この 50 余年間順調に推移したわけではありません。昭和 51 年から平成 10 年までの 23 年間全く勝つことが出来ませんでしたし、部員の減少により、存続の危機さえありました。また、昭和 54 年清長登志雄君が試合中に転覆、湖底に沈み帰らぬ人となりました。翌 55 年には、当時武庫川西岸にあった艇庫に不法侵入者が入り放火、艇庫・艇を失う事態にも遭遇しました。これらの試練を乗り越えられたからこそ今日のカヌー部が存在し得たのだと思います。

4. 関学カヌーとわたくしについて

昭和 35 年、社会学部 I 期生として入学しました。高校まで本格的にスポーツに取り組んだことがありませんでしたので、体育会の活動にはついていけないだろうと思っていた矢先、同好会紹介の小冊子を見る機会があり、カヌー同好会の存在を知りました。香櫨園浜を訪ねて活動の様子を見学、雰囲気良かったので入会しました。当時はカヤックペアーとファルトボートしかなく、乗艇する機会が限られていましたので、近辺でのランニングや筋トレが主で、それが結果的に基礎体力の養成になったと思います。翌昭和 36 年、戸田漕艇場での日本選手権に出場、当時はまだ競技人口も少ないこともあり、最下位でしたが決勝まで進むことが出来ました。この昭和 36 年秋、東京オリンピックでカヌーが正式種目として採用されること決定しました。翌 37 年からオリンピックに向けての準備が始まり、手始めに欧州選手派遣選考会があり、瀬田川で長期合宿をし、試合に臨みましたが、大正大学・慶應義塾大学の後塵を拝する結果におわりました。同 37 年の日本選手権でも K-2 で決勝に残りましたが、またも最下位で結果を残すことが出来ませんでした。この時にドイツの選手が招待され、レースをともにしましたが、力の差は歴然としていました。また、デンマークのコーチが来日し、講習会が開催されたのもこの年でした。オリンピック前年の昭和 38 年春、第一次オリンピック候補選手選考会が行われ、一定の結果が残せましたので、第一次の候補選手として推薦を受けました。しかし、その後の体調や就職活動での練習不足で成績は下降線をたどり、この年開催された第一回関西カヌー選手権 K-1

1000m で 3 位に終わり、優勝経験なく競技生活が終わりました。

同好会に入会した時には、まさかこんなことになるとは思いませんでした。大学に入って一からはじめ、何とかやり終えることが出来たのは、今思えば、よく言われます「継続は力なり」、まさにこの一言に尽きると思います。

5. 卒業後について

特殊鋼メーカーに入社、営業・人事・生産管理部門等を担当し、勤務地も大阪・東京・名古屋を経験いたしました。社会人としての生活とクラブ活動との関わり合いにおいて感じますのは、スポーツに取り組んだ結果、健康で強い身体が作ることが出来たこと、その身体を動かすことが全く苦に成らなかったことだと思います。営業や生産管理(工場勤務)勤務時に特にそれを感じました。

また、同好会入会時にはオリンピックと関わり合いが出てくることなど思いもよりませんでした。取り巻く環境の変化にどの様に対応すべきか、していかなければならないか、答えは出ませんでした。そのような変化を経験出来たことで、課題に対して結果を恐れず前向きに真正面から取り組むことの重要性を知ることができたと思います。

6. 学生へのメッセージ

大学の 4 年間は何もののにも代えがたい貴重な時だと思います。学業を疎かには出来ませんが、是非、何かの部・クラブ・団体等に入って学業以外の活動を経験して下さい。団体の中でのルールに従った行動・活動、団体の達成すべき目標を設定し、その目標を達成するための対策や課題の検討・実行、団体の運営・維持・管理、団体内での先輩・同輩・後輩との人間関係等、多種多様な勉強・経験ができると思います。そうした勉強・経験は卒業後の生活に必ず生きてくるはずです。

また、団体活動・合宿等で寝食を共にした仲間とは一生関わり合うことになる素晴らしい友人になります。是非、大学時代を有意義に過ごして下さい。



(写真提供『関学スポーツ』)



(写真提供：執筆者)